「まちづくり×子育て～子どもが見える風景を目指して」

2016.3.19

～本日の流れ～

1.親子の行動特性と居場所

乳幼児とその親の日常的な行動スタイルは?

地域の中で親子が居場所として選択する際の基準は?

親子で外出するときの「こうだったらいいのにな」

2.まち保育と地域資源

保育施設のお散歩活動からみた地域環境のあり方とは?

子どもの成育環境として捉えたまち資源のイメージ

3.< 実践事例 >
地域つながり力アップワークショッププロジェクト

子どもの目線でまちを歩いてみよう

地域資源の情報共有によりつながるきっかけを創出

子どもを地域で育てるために「まち保育」の視点という発想

※2013年こども環境学会全国大会「優秀ポスター発表賞」受賞,「保育施設と地域の共同関係構築に向けた実践～保育所×地域　つながり力アップ・ワークショッププロジェクト～」

◇松橋圭子　まつはしけいこ

鎌倉女子大学児童学部児童学科・准教授／横浜国立大学工学府社会空間システム学専攻建築学コース（大原一興研究室）博士課程修了／博士（工学）／**専門分野**：地域・建築計画、施設計画、こども環境行動学、子育て支援／子どもとその親の視点からみた児童福祉施設の計画・地域子育て支援環境・まちづくりや都市空間整備に関する実践的調査研究に関わる。

第3回上郷東地区まちづくり協議会

「まちづくり×子育て
～子どもが見える風景を目指して」

鎌倉女子大学
松橋圭子

本日の流れ

親子の行動特性と居場所

まち保育と地域資源

【実践事例】
地域つながり力アップ
ワークショッププロジェクト

数値化　　お散歩マップ　　アクション

まちづくり×子育て　＝　まちを考える力

乳幼児同行者による駅利用に関する研究

ー子育てバリアフリーに対応した地域環境づくりの考察

平成21年度
横浜市を対象とした調査
保土ヶ谷区・旭区・緑区・都筑区・港北区・南区

【アンケート調査概要】

日常的な親子での外出行動に着目

親子の行動圏の把握

表1.

調査対象
４歳未満の子どもを持つ保護者
アンケート回答率
配布数：1444通／回収数：540／回答率：37.4%
調査内容
①外出行動と駅利用　②外出時の意識 ③利用駅の評価　④外出先で困った経験 ⑤望む子育てバリアフリー整備　など

◇横浜市内の中規模駅10箇所周辺での配布（1日の利用者が5万人程度）
◇乳児健診での手渡し及び子ども関連施設での配布

親子での外出に求められるニーズと「居場所」となる条件

平成15年度
三鷹市における「親子の居場所」に関する調査　注1）

親子の行動パターンからみた子育て世帯の日常的な地域資源の利用に関する研究

平成25年度　ー横浜市青葉区、金沢区、西区を事例に　注2）
横浜市大三輪ゼミ(西田修論)

公園とまち保育研究会　調査より

親子で平日に出かける場所の実態

平成25年度　ー横浜市青葉区、金沢区、西区を事例に

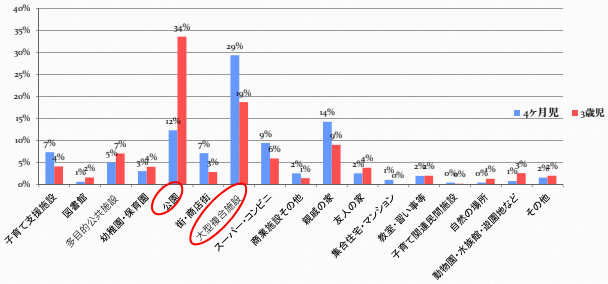

図1. 4ヶ月児・3歳児「よく行く場所」の用途分類(N=382)

4ヶ月児は「商業施設（大型複合施設）」、3歳児は「公園」が
それぞれの最も「よく行く場所」として挙げられた。

親子で外出する際のニーズ

【一時避難ができるスペースが欲しい】

・移動中にちょっと休める場所

・バスを待つときの暑さや寒さ、 風除けスペース

・泣いてしまったときに駆け込みあやせる場所

・乗り降りの際にベビーカーをたたむ場所

・荷物をまとめる場所

・ガラス張りなど、安全性も確保された スペース

【写真1. 欲しい場所のイメージ】

親子で外出する際のニーズ

誰でも自由におむつ替えや授乳ができる

・コンビニの中に赤ちゃんステーション的な スペース・機能があればいいのに

※赤ちゃんの駅 検索サイト

歩道整備・安全確保等ハードの整備

・出歩きやすいまち

図2.赤ちゃんの駅 取組例

地域に分散させた
「避難所・居場所」の提供

親子にとっての「身近さ」はおおよそ250～300m程度

保育施設における園外活動の実態からみた 地域資源のあり方に関する研究

平成22年度
横浜市内全保育施設を対象としたアンケート調査 注3)

・駅前のビル内等屋外遊戯場をもたない保育所の増設

・受け入れ人数の増加から既存施設では子どもの人数に応じた 屋外遊び場、必要で十分な屋外遊戯場の確保が困難

■保育施設の屋外活動環境と園外活動の実態

保育施設の園外(屋外)活動頻度は非常に高く、2歳児8割以上 ほぼ毎日園外活動を実施、60分以上(63%)地域をお散歩

【保育のねらい】

①体力増進・運動能力向上 ②健康保持 ③自然に触れ変化を感じる
④生き物に触れる ⑤身近な施設や生活に関心を持つ
⑥地域の人々と交流 ⑦交通ルールなどの安全意識習得

子どもの成育環境として捉えたまち資源のイメージ

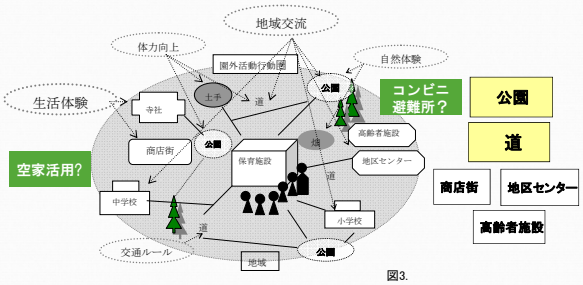

図3.

まち全体の歩道整備・安全確保等ハードの整備

子どもの成長を見守る近隣住民とのつながり

実践事例／ お散歩マップを介した 保育所×地域のつながり力 アップの試み

「保育施設と地域の共同関係構築に向けた実践
～保育所×地域 つながり力アップ・ワークショッププロジェクト～」
2013年こども環境学会全国大会「優秀ポスター発表賞」受賞,

①まちあるきキット

②まちあるき

③まとめ作業

④発表

お散歩マップでつながり力アップ　子ども×シニア層

まごマップ
たまご(他孫)マップづくり

・**防災・減災**など、地域の重要度の高い地域資源情報を共有する仕組みを契機とした関係構築の可能性

図4.

調査詳細資料

注1) ■研究の方法

◆東京都三鷹市
◆平成15年11月～12月
「親子の外出に関するアンケート調査」
◆4歳未満の子どもを持つ親子対象

表2　回収結果

	配布数	回収数	有効回収数
合 計	915	239	26.0%

項 目	結	果
性別	全員女性(母親)	
年齢	「30～34歳」43.3% 「25～29歳」20.2%	「35～39歳」26.9%
就労状況	「働いていない」75.2% 「働いている」13.0%	「育児休業中」11.3%
就業形態	「フルタイム」41.9%	「パートタイム」29.0%
家族形態	「核家族」87.0%	「祖父母との同居」10.5%
子どもの数	1人65.5%　2人30.3%	
居住歴	平均6.2年　転居後5年未満が多い56.7%	
居住形態	一戸建て29.0%　マンション(5階以下)25.2%アパート23.5%	

表3　回答者の基本的属性

◇評価グリッド法による聞き取り調査も追加
平成15年11月：アンケート回答者の中で
調査に協力可能な50名

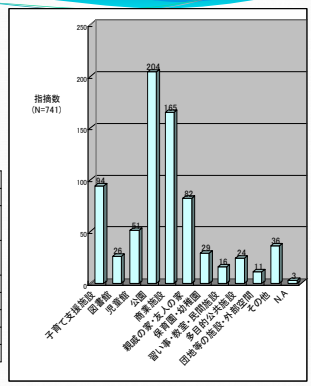

図5.　平日に親子で出かける場所分類

注2) ■研究の方法と目的

子どもの成長と子育て世帯の日常的な地域資源の利用および親子の行動パターンを把握→子育て世帯と地域資源とがどのように繋がればいいのか提案

表3　アンケート調査の概要

	配布数	回収数	回収率	有効回収数	有効回収率
4ヶ月児健診	627	174	27.8%	173	27.6%
青葉区	315	68	21.6%	68	21.6%
西区	167	52	31.1%	51	30.5%
金沢区	145	54	37.2%	54	37.2%
3歳児健診	876	214	24.4%	209	23.9%
青葉区	370	82	22.2%	80	21.6%
西区	193	53	27.5%	51	26.4%
金沢区	313	79	25.2%	78	24.9%
合計	1503	388	25.8%	382	25.4%

＜アンケートの内容＞
・親子の外出で「よく行く場所」について（最大5ヵ所まで記入。そこで誰となにをするか、そこにいく理由など）
・近隣地域との関係性
・基本的属性（年齢・性別・就労、子どもの人数など）
・居住地について

アンケートの配布は2013年8月～11月にかけて行い、郵送回収とした。
実際の配布枚数は1503枚、有効回収数は382枚（有効回収率25.4%）であった。

注3) ■研究の方法

◆横浜市全保育施設対象
◆平成19年～24年にかけて継続的に実施
「保育施設の屋外環境と園外活動の実態に関する研究」

表4　アンケート調査概要　※平成19年度版

種別		施設数	定員	アンケート回答率		
				配布数	回収数	回収率
認可保育所	全体	390	33944	390	138	35.4%
	公立（含・公営民設2箇所）	110	9277	110	48	43.6%
	私立	280	24667	280	90	32.1%
認可外保育施設	横浜保育室	133	4132	133	43	32.3%
			計	523	181	34.6%

調査項目
・施設の基本概要（保育所名・建物形態・開設年・園児数・保育者数・回答者勤続年数等）
・施設敷地内屋外活動環境の現況及び評価（園庭面積・屋外設備・自然環境・安全性等）
・保育のねらいと園外活動の状況（年齢別活動頻度・時間・移動経路と形態・活動場所等）
・公園の利用状況(公園名・頻度・滞在時間・評価・要望等)
・公園での地域交流の状況(交流頻度・交流内容・管理団体について等)

保育施設と地域の協働関係構築に向けた実践
～保育所×地域　つながり力アップ・ワークショッププロジェクト～

西田あかね・平本智恵里・渡辺志穂（横浜市立大学国際総合科学部）,岩﨑俊貴（横浜国立大学都市イノベーション学府）
三輪律江（横浜市立大学）,田中稲子・稲垣景子・藤岡泰寛（横浜国立大学）,松橋圭子（鎌倉女子大学）,谷口新（大妻女子大学）

1.背景

横浜市では、ここ数年における保育施設の待機児童数の増加や社会の保育ニーズの多様化を受けて、商業地域や駅前といった場所に園庭を持たない保育施設が増加している。これらの施設の多くは「まちは園庭」という視点で日常的にお散歩活動を行ない、地元の公園などを園庭代わりに利用している[注1]。

保育施設にとって災害などの緊急時における地域との連携は重要である。特に 3.11 の大震災を機に多くの保育施設がその必要性を感じているが、地域との関係構築の仕方が分からないといった声が多く、新設の保育施設ほど課題となっている。そのような保育施設と地域住民をつなぐきっかけ作りが必要となっている。

2.目的

以上の背景をもとに、保育施設が独自に作成しているお散歩マップに注目し、保育士や地域住民が一緒にまちあるきをしてお散歩マップづくりを行うワークショップ（以下 WS）を企画した。WS を通じて各々が把握している地域資源の情報を共有することで、両者がつながるきっかけを提供することがねらいである。両者がつながることの効果としては次の点が挙げられる；

1)保育施設にとって：①家庭と同様に、子どもが「地域」で育まれていく環境の担保。②日常的な安心感から非常時の安心感の担保。

2)地域にとって：①乳幼児期の子ども目線でのまちの再点検・再評価・再整備をすることで、「子どもが育てやすいまち」という価値づけができる。②保育施設を地域に住む子育て家庭のための避難場所的な位置づけとする「新しい地域防災体制」にも展開可能。

3.活動の概要

横浜市青葉区市が尾にある横浜市認可ピッピ保育園と青葉台にある家庭的保育室なないろにて、各 3 回ずつ（計 6 回）WS を実施[注2]。以下にテーマの概要を示す；

①各保育施設のお散歩マップのルートを検証。

②子どもの目線でまちを検証。

③防災目線でまちの安全・安心アイテムを点検。

4.考察

これまでの活動を通して、次のような成果があった。

1）保育施設にとって：①「防災」をテーマとした WS の開催にあたり、各保育施設の働きかけによって地域防災拠点内への立ち入りや自治会長に防災備蓄庫の説明を受ける企画が実現したことが地域との関係作りのきっかけとなった。②保育士がまちを点検する視点やノウハウを習得。③保育施設が抱えていた問題を表に出し、その解決に向けて動き出すことが出来た。

2）地域にとって：①保育施設が抱えている「地域との関係構築の仕方がわからない」という問題の認識。②WS が参加者同士の交流のきっかけとなった。

5.まとめ・今後の課題

これらの活動を通して、1 年目にして特に新設の保育園が抱えている問題が地域に認識された点、保育施設と地域がつながるきっかけの提供が出来た点で効果が得られたと考える。今後の課題としては、より地域の様々な人を活動に巻き込んでいくために地域のニーズにすり合わせた WS のテーマ設定などを考える必要がある。また、商店街や行政などともつながるきっかけを見つけていく必要がある。

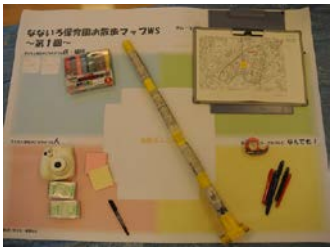

写真 1. まちあるきキット

写真 2. てくてくあおば[注3]

本研究は 2012 年度科学研究費助成基礎研究(C)『「乳幼児生活圏」構築に向けた地域協働型まちづくりのための地域資源解明と手法開発(代表:三輪律江)』および『横浜市立大学平成 24 年度学生が取り組む地域貢献活動支援事業』として実施したものである。

謝辞 一連の取り組みを進めるにあたり、WS に参加して下さった方々および関係者各位に深く感謝いたします。

注 1)これら新設の保育園への調査・ヒアリングを実施したところ、上記の実態とは裏腹に地域住民との交流はほとんど行われていないということが明らかになった[文1)]。

注 2)WS は保育所や子育て支援拠点を会場として実施した。

注 3)毎回のまちあるきの成果や発見はニュースレター（「てくてくあおば」）として地域に発信した。

参考文献 1)松橋、三輪ら「保育施設における屋外環境と園外活動の実態からみた地域資源のあり方に関する研究-横浜市におけるアンケート調査より-」日本建築学会計画系論文集第 651 .PP.1017-1024, 2010